

Research on the differences between open-eye image and closed-eye image conditions : Paying special attention to personality traits and imagery tendencies

許, 寧

九州大学大学院人間環境学府

澤, 聡一

九州大学大学院人間環境学府

田嶋, 誠一

九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/8033>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 7, pp.203-210, 2006-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



開眼イメージ法と閉眼イメージ法の差異に関する研究

—性格特性とイメージ傾向に注目して—

許 寧・澤 聡一 九州大学大学院人間環境学府
田 篤 誠一 九州大学大学院人間環境学研究院

Research on the differences between open-eye image and closed-eye image conditions
—Paying special attention to personality traits and imagery tendencies—

Kyo Nei and Toshikazu Sawa (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Seiichi Tajima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined to open-eye visual imagery, which is known as a safety therapeutic method, and the differences between the image conditions during open-eye and closed-eye visual imagery with regard to vividness and controllability. Despite the previous study to evaluate open-eye and closed-eye visual imagery, this research has shown that there are some differences between their visual imagery, which is closely related to those in personality traits, especially with regard to neurotic tendency. In addition, administering a further questionnaire to selected subjects resulted in a new finding; namely that the relative effectiveness of open-eye visualizing and closed-eye visualizing depends to some extent on which method was perceived by the subjects as his/her favorite or as the easier method. That is, individual perceptions about these methods of visual imagery will have some effect on the subject's degree of success with either method. When using visual imagery therapy, it would be important that we accept these personality traits and use different methods, through which clients may experience imagery in a safer and more efficient conditions.

Keywords: imagery, open-eye and closed-eye, personality traits, imagery tendencies

問題と目的

イメージ (心像, imagery) は, 人間にとって大変身近であり, かつ非常に重要な活動である。長谷川 (1993) は, イメージを「感覚刺激が存在せずに感覚経験に類似して生起し, しかも心理的効果をもたらす心的過程」と定義しているが, 知覚 (Hatakeyama, 1997) や思考 (上杉, 1983), 記憶 (Richardson, 1969 鬼沢・滝浦訳, 1973) や創造性 (穂山, 1983; 宮崎, 1989), 感情 (Ashen, 1984; Horowitz, 1983) などイメージが影響を及ぼす範囲は幅広い。

イメージの持つ影響力を活用した代表的な試みのひとつに, イメージ療法がある。イメージ療法には, 国内に限定してみても, イメージ分析療法 (柴田・坂上, 1977), 三角形イメージ体験法 (藤原, 1980), 壺イメージ療法 (田篤, 1983) などさまざまな技法 (イメージ法) が知られており, 心理療法として実践が積み重ねられている。また, イメージによる治療機序としては, 多くの研究者がイメージの持つ自律性が重要であると指摘し, その治療的効果に注目している (藤岡, 1974; 栗山, 1979; 水島, 1983)。イメージの自律性とは, イメージにはそれ自体に独自の

論理と運動の様式があり, その流れに従ってイメージが展開されていくという性質を指す (藤岡, 1974; 栗山, 1979)。この自律性が十分に機能しだすと, イメージはより鮮明で生き生きとし出し, 深い情動体験や場合によっては行動の変容も引き起こされると考えられている。

その反面, 時としてイメージが大きな危険をもたらすこともまた知られている (水島, 1967; 田篤, 1983; 水島・成瀬・藤原, 1999)。たとえば田篤・成瀬 (2003) は, 自我の弱い重篤な患者に対するイメージ療法の適用は, しばしば強烈で危機的な体験もしくはその予感といったものを急激に引き起こし, 症状ないし状態の悪化, 治療関係自体の崩壊につながる危険性がある, と指摘している。

いくつかのイメージ法においては, イメージの持つこれらの危険性について工夫がなされている (増井, 1986; 田篤, 1987; 福留, 1994)。たとえば, 壺イメージ療法 (田篤, 1987; 1996) は, 「壺」という安全感のあるイメージのなかでイメージを体験し, 終了後には「蓋」を被せる, という二重の安全弁が設けられている。しかし, 一般的なイメージ法における危険性への対処は概ね面接者の技量に委ねられているところが大きく, イメージの危

険性を低減するための工夫をさらに積み重ねていくことでイメージ法の適用範囲に更なる広がりがみられるだろう。

この点で注目される視点の一つは、福留(2004)の開眼イメージ法である。イメージ法は閉眼安静状態で進められるのが標準的な手続きだが、福留(2004)は、それのみでは「閉眼」への恐怖や、普段と異なる意識状態に導かれることへの抵抗感などの困難に遭遇すると指摘して、「イメージ世界の中核と距離を保ったまま繋がる方法」としての開眼イメージ法の重要性を指摘している。田嶋(2003)もまた、目を閉じることについてのクライエントの不安などを指摘し、閉眼イメージ法と開眼イメージ法の区別は重要であると述べている。

イメージの開眼-閉眼に注目した実験的研究には、Narchal & Broota (1988) や野村(1993)があるが、いずれの研究においても両条件間でイメージの鮮明性(vividness)に有意な差が見られていない。鮮明性や統御可能性(controllability)はイメージの基本的な特徴として広く用いられており、これらはまたしばしば性格特性との関連で検討されている。神経症傾向や特性不安などとイメージの諸特性についてはさまざまな結果が得られており(Singer & Antrobus, 1972; 松本, 1999; Euse & Haney, 1975), たえば松本(1999)は、特性不安の高い被験者群はイメージの想起が少なく、イメージに直面することが困難であると述べている。

本研究では臨床心理援助への応用を考え、神経症傾向と開眼-閉眼のイメージ想起条件が、イメージの鮮明性や統御可能性に及ぼす影響について検討する。また、想像活動への没入傾向、イメージ想起方法の好み、思い浮かべやすさなどのイメージ傾向との関連についても、同様に検討を行う。

方 法

被験者

大学生125名(男子88名, 女子37名; 平均年齢19.5才)。

質問紙

①Vividness of Visual Imagery Questionnaire (視覚心像鮮明性尺度; VVIQ)

イメージの鮮明性尺度として、VVIQ (Marks, 1973)が知られている。本研究では、長谷川(1993)による訳出版を用いた。VVIQは、「知人の姿」「空の景色」など、複数のイメージ対象の想起を求め、その鮮明性の評価を求める自己記入式の尺度である(16項目, 5件法)。

②Test of Visual Imagery Control (視覚心像統御可能性尺度; TVIC)

イメージの統御可能性尺度として、TVIC (Gordon,

1949)が知られている。本研究では、長谷川(1993)による訳出版を用いた。TVICは、「自動車」の視覚イメージの想起を求め、その自動車を次々と統御し変化させることを求める尺度で、12項目から成る(3件法)。

③Maudsley Personality Inventory (新モーズレイ性格検査; MPI), N尺度

性格特性の測定尺度として、MPI (MPI研究会, 1964)のN尺度を用いた。MPIは広く用いられている性格測定のための尺度であるが、その部分抜粋であるN尺度は神経症傾向を測定するための尺度である(24項目, 5件法)。

④Imaginative Involvements Inventory (想像活動への没入性尺度; III) 短縮版, III-14

イメージ傾向の一側面として、想像活動への没入性尺度の短縮版 III-14 (笠井ら, 1993)を用いた。IIIは、「感覚体験」「戸外」など、複数の場面における想像活動への没入傾向を測定する尺度で、合計18項目から成る。本研究では、IIIの短縮版である III-14を用いた(7件法)。

⑤開眼-閉眼イメージの想起傾向についての質問項目
開眼イメージと閉眼イメージという二つの方法のうち、どちらが好みであるか、またどちらが想起しやすかったかを尋ねるため、「どちらの方法が好きですか」「どちらの方法が思い浮かべやすかったですか」という項目を作成して用いた。いずれの項目も、「閉眼」「開眼」「どちらでもない」のいずれかを選んで回答するよう求めた。

手続き

実験は講義時間の一部を用いて、集団を対象に実施した。被験者は、イメージについての説明を受けた後に質問紙を配布され、次のような手順で回答を行った。

①開眼イメージ条件(あるいは閉眼イメージ条件)でのVVIQ, TVICの回答, ②MPI (N尺度), III-14の回答, ③閉眼イメージ条件(あるいは開眼イメージ条件)でのVVIQ, TVICの回答, ④開眼-閉眼イメージの想起傾向についての質問項目(どちらが好きか, どちらが思い浮かべやすかったか)への回答。

なお、開眼イメージ条件と閉眼イメージ条件についての説明は、それぞれの尺度への回答の直前に、文書で行われた。また、開眼イメージ条件と閉眼イメージ条件の実施順序にはカウンターバランスがとられた。質問紙はその場で回収し、実験の全体にはおよそ30分を要した。

結 果

分析に先立って、用いた尺度の信頼性を検討する目的で、VVIQ, TVIC, MPI (N尺度), III-14それぞれの下位項目について、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、各尺度の α 係数は.80以上であり、十分な信頼性を

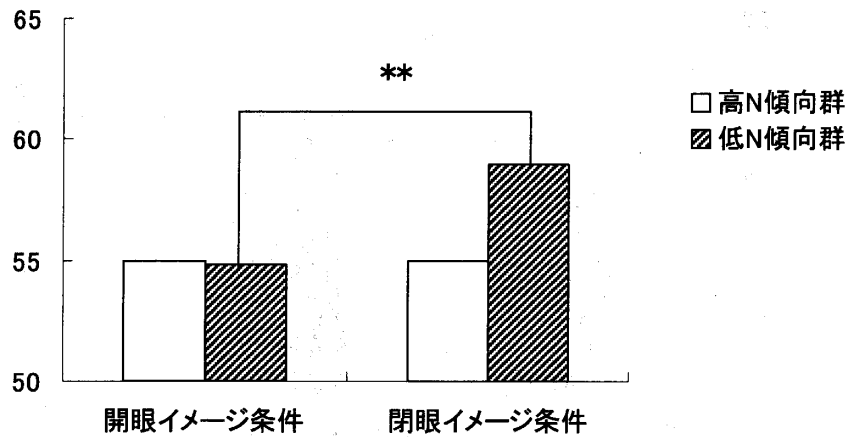


Fig.1 N尺度得点と開眼—閉眼イメージ条件がイメージの鮮明性に及ぼす効果 (** $p < .01$)

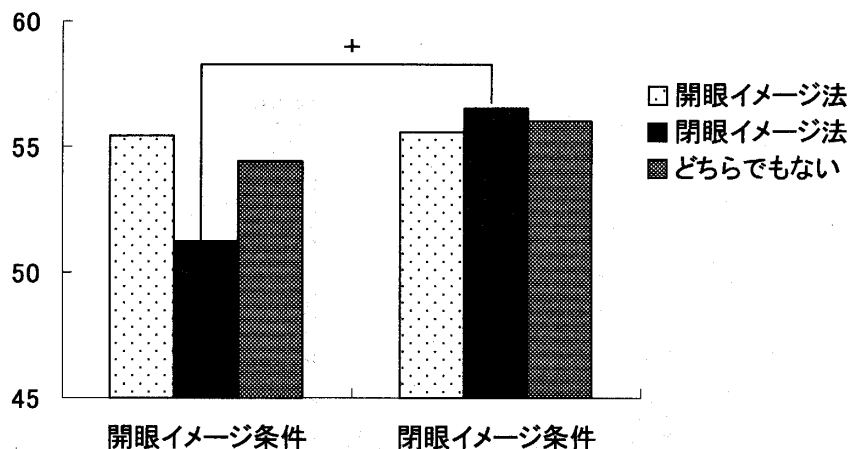


Fig.2 好きなイメージ法と開眼—閉眼イメージ条件がイメージの鮮明性に及ぼす効果 (+ $p < .10$)

有することが確認された。また、被験者数における男女比の偏りがおよぼす影響が予想されたが、以降の分析のいずれにおいても有意な性差の効果は認められなかった

性格特性と開眼—閉眼イメージ条件の分散分析

MPI (N尺度)の高得点上位30%と低得点下位30%を抽出し、それぞれ高N傾向群、低N傾向群として用いた。VVIQ得点を従属変数とし、被験者群(高N傾向/低N傾向)×イメージ想起条件(開眼/閉眼)を独立変数とした二要因の分散分析を実施した結果、被験者群とイメージ想起条件の主効果および交互作用のそれぞれに有意な差が認められた ($F_{(1,72)}=4.121, p < .05$; $F_{(1,72)}=0.464, p < .05$; $F_{(1,72)}=4.121, p < .05$)。被験者群につい

て、低N傾向群が高N傾向群よりも有意にVVIQ得点が高いことが示された。交互作用についての多重比較の結果は、Fig.1に示す。

なお、TVIC得点を従属変数とした同様の分析を行ったが、主効果、交互作用のいずれにおいても有意な差は認められなかった。

イメージの想起傾向(好きなイメージ法)と開眼—閉眼イメージ条件の分散分析

イメージの想起傾向として、開眼イメージ条件と閉眼イメージ条件のいずれが好きであったかを尋ねた結果、57名(46.3%)が開眼イメージ条件を、42名(34.1%)が閉眼イメージ条件を、24名(19.5%)が「どちらでも

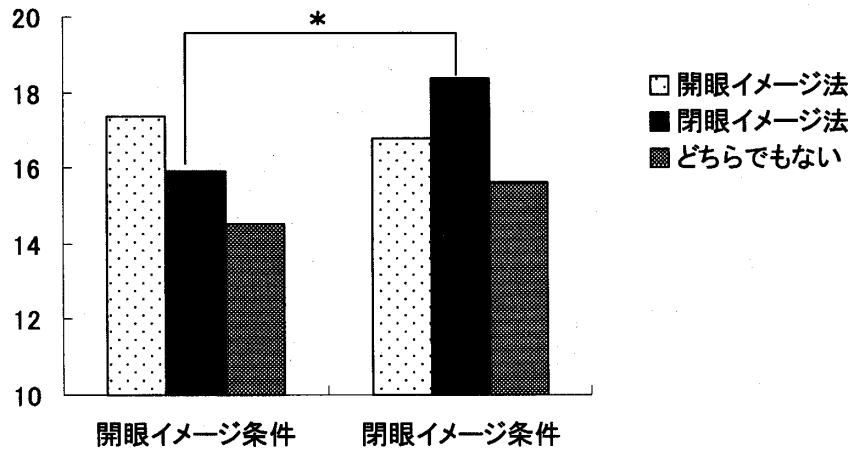


Fig.3 好きなイメージ法と開眼-閉眼イメージ条件がイメージの統御可能性に及ぼす効果 (* $p < .05$)

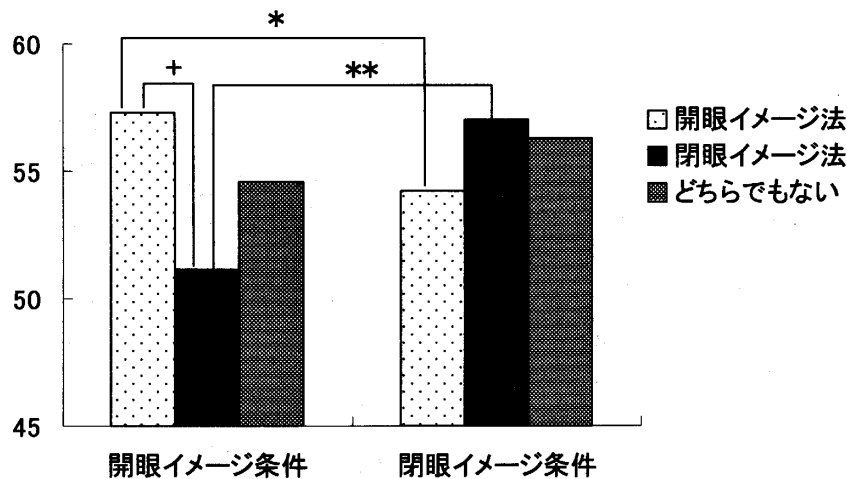


Fig.4 思い浮かべやすいイメージ法と開眼-閉眼イメージ条件がイメージの鮮明性に及ぼす効果 (+ $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$)

ない」を選択した(未回答2名)。

好きなイメージ法(開眼/閉眼/どちらでもない)×イメージ想起条件(開眼/閉眼)を独立変数とし、VVIQ得点およびTVIC得点を従属変数とした二要因の分散分析を実施した。VVIQ得点を従属変数とした場合、イメージ想起条件の主効果に有意な差が、また交互作用に有意な差の傾向が認められた($F_{(1,120)}=6.989, p < .01$; $F_{(2,120)}=3.047, p < .10$)。イメージ想起条件について、閉眼イメージ条件が開眼イメージ条件よりも有意にVVIQ得点が高いことが示された。交互作用についての多重比較の結果は、Fig.2に示す。

また、TVIC得点を従属変数とした場合、イメージ想起条件の主効果と交互作用に有意な差が認められた

($F_{(1,120)}=4.404, p < .05$; $F_{(2,120)}=3.393, p < .05$)。イメージ想起条件について、閉眼イメージ条件が開眼イメージ条件よりも有意にTVIC得点が高いことが示された。交互作用についての多重比較の結果は、Fig.3に示す。

イメージの想起傾向(思い浮かべやすいイメージ法)と開眼-閉眼イメージ条件の分散分析

開眼イメージ条件と閉眼イメージ条件のいずれがイメージを思い浮かべやすかったかを尋ねた結果、38名(30.9%)が開眼イメージ条件を、58名(47.2%)が閉眼イメージ条件を、27名(22.0%)が「どちらでもない」を選択した(未回答2名)。

思い浮かべやすいイメージ法(開眼/閉眼/どちらで

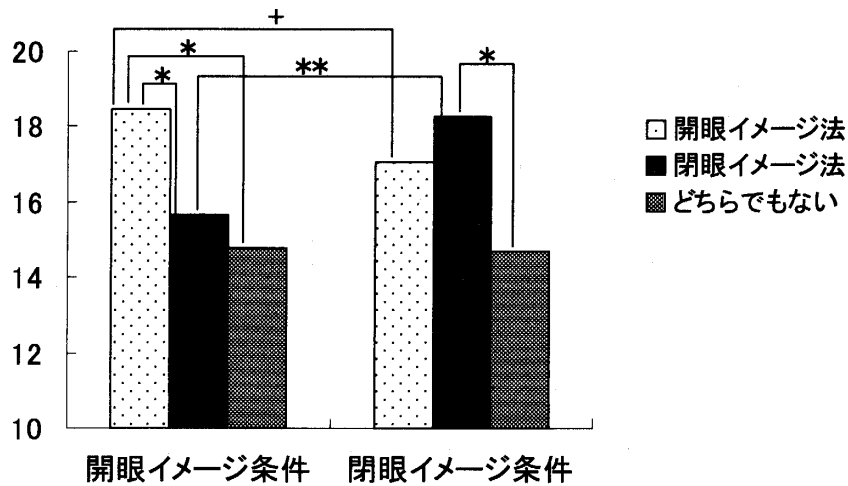


Fig.5 思い浮かべやすいイメージ法と開眼-閉眼イメージ条件がイメージの統御可能性に及ぼす効果 (+ p<.10; * p<.05; ** p<.01)

Table 1
各測定尺度間の相関分析

	VVIQ (開眼)	VVIQ (閉眼)	TVIC (開眼)	TVIC (閉眼)	MPI (N尺度)
VVIQ (閉眼条件)	.65**				
TVIC (開眼条件)	.34**	.32**			
TVIC (閉眼条件)	.28**	.37**	.72**		
MPI (N尺度)	.05	-.08	-.07	-.04	
III-14	.19	.21*	.32**	.35**	.24**

*p<.05, **p<.01.

もない) × イメージ想起条件 (開眼/閉眼) を独立変数とし、VVIQ 得点および TVIC 得点を従属変数とした二要因の分散分析を実施した。VVIQ 得点を従属変数とした場合、交互作用に有意な差が、またイメージ想起条件の主効果に有意な差の傾向が認められた ($F_{(2,120)} = 10.010, p < .01$; $F_{(1,120)} = 3.297, p < .10$)。交互作用についての多重比較の結果は、Fig.4に示す。イメージ想起条件については、閉眼イメージ条件が開眼イメージ条件よりも有意に VVIQ 得点が高い傾向があることが示された。

TVIC 得点を従属変数とした場合、交互作用に有意な差が、また思い浮かべやすいイメージ法の主効果に有意な差の傾向が認められた ($F_{(2,120)} = 6.728, p < .01$; $F_{(1,120)} = 2.707, p < .10$)。交互作用についての多重比較の結果は、Fig.5に示す。加えて、思い浮かべやすいイメージ法が閉眼イメージ法である方が、思い浮かべやすいイメージがどちらでもない場合よりも有意に TVIC 得点が高い

傾向が示された。

各測定尺度と想像活動への没入性尺度の相関分析

各測定尺度間の関連について補足的に検討することと、想像活動への没入性尺度 (III-14) との関連を検討する目的で、各測定尺度間の Pearson の積率相関係数を算出した。結果を Table 1 に示す。なお、III-14 と他の尺度の関連については、VVIQ (開眼条件) を除いて、各尺度との間に有意な弱い正の相関関係が認められた。

考 察

性格特性と開眼-閉眼イメージの関連

MPI (N尺度) の高低によりグルーピングを行い、開眼イメージ条件と閉眼イメージ条件がイメージの鮮明性と統御可能性に及ぼす影響について検討を行った。分散分析の結果、VVIQ 得点について開眼-閉眼イメージ条

件の主効果と交互作用が認められた。すなわち、閉眼条件でのイメージ想起は開眼条件に比して鮮明性が高く、とりわけ低N傾向群が閉眼イメージを用いた場合は、他の条件に比較して有意に鮮明なイメージが報告された(Fig.1)。なお、TVIC得点については有意な効果は認められず、開眼-閉眼のイメージ条件がイメージの統御可能性に及ぼす効果は本研究では示唆されなかった。

開眼-閉眼イメージの想起条件が鮮明性得点に有意な効果を示したという結果は、先行研究(Narchal, 1988; 野村, 1993)と異なっている。この点について本研究でのN傾向の主効果と交互作用の結果から考察すると、閉眼イメージ条件での鮮明性の高さは、主に神経症傾向の低い群に由来する可能性が高い。したがって、性格特性など他の要素との関連から開眼-閉眼イメージの効果を検討していく視点が重要であるのかもしれない。なお、神経症傾向とイメージの鮮明性および統御可能性を検討した先行研究にはStricklin & Penk (1980)やEuse & Haney (1975)、長谷川 (1984)などがあるが、神経症傾向と鮮明性の関係は正であるとも負であるとも言われており、一貫した結果が得られていない。本研究で注目した開眼-閉眼のように、イメージの想起条件に注目する視点が有効かもしれない。

また、神経症傾向の低い群がなぜイメージの鮮明性が高いかを説明する一つの可能性として、神経症傾向が低く、したがってイメージへの不安が比較的小さい被験者にとっては、閉眼し外界の視覚刺激を断った方が、より鮮明で生き生きとしたイメージを体験できた、と考えることができるだろう。イメージ療法の臨床場面においては、これらの特性に応じた開眼イメージ法と閉眼イメージ法の使い分けが有効であると思われる。

福留(2004)は、開眼イメージ法が効果を持つ場合として、“閉眼”への抵抗がある場合、即効性を要する場合などを指摘している。これらの視点を踏まえつつ本研究の結果について、更なる知見の蓄積が望まれる。とりわけ本研究の対象が健康な大学生で、質問紙への回答を中心とした実験手続きであったことを考慮すると、より重篤な臨床場面でのクライアントに対しては積極的な開眼イメージの効果が見いだされる可能性がある。

イメージ傾向と開眼-閉眼イメージの関連

開眼イメージと閉眼イメージの「どちらの方法が好きですか」「どちらの方法が思い浮かべやすかったですか」を各被験者に尋ね、その結果をイメージ法の選択傾向とみなして分析を行った。その結果、神経症傾向に注目した分析と同様の開眼-閉眼イメージ条件の主効果のみならず、好きなイメージ法や思い浮かべやすいイメージ法に関連した交互作用が数多く認められた(Fig.2-Fig.5)。中でも、開眼イメージ法を思い浮かべやすいと感じた者

は思い浮かべやすいイメージがどちらでもないと感じた者よりもTVIC得点有意に高い傾向であったことを示す結果も認められており、これらのイメージ想起傾向が重要な個人差の次元であることを示唆している。

自分の好きなイメージ法、あるいは思い浮かべやすいイメージ法であることによって鮮明性や統御可能性が相対的に高まるのはある意味常識的であるが、従来の心理臨床場面におけるイメージ法においてこれらの区別をしているという報告は少ない。田嶋(1983)は、クライアントのペースに沿って無理なく(イメージ)面接を進めるためには、「注文をつける能力」の育成が重要であると指摘している。好きな、あるいは思い浮かべやすいイメージ法を選択し、じっくりするイメージの様式を選ぶようになることは、この「注文をつける能力」とも関連するだろう。好きなイメージ法や思い浮かべやすいイメージ法を問うことは、想起傾向の個人差を知る手段であると同時に「注文をつける能力」を育成する重要な介入法であるのかもしれない。

本研究の結果はまた、どのようなイメージの想起方法が「好きであるか」よりも「思い浮かべやすいか」の方がより重要な視点であることを示唆している。後者については、単純に交互作用の数が多いということのみならず、異なるイメージ想起条件間で有意な差が認められた。一つには、「思い浮かべやすいか」という問いは、「好きであるか」よりも一層具体的で、明細化を求める問いであることが影響しているのかもしれない。イメージは個人差が大きい領域であり、その一方で主観的体験であるために測定が困難であると指摘されている(菱谷, 1984)が、どのような問いかけがイメージの個人差を評価する際に有効であるかを知ることは、研究と臨床のいずれにおいても重要な点といえよう。

想像活動への没入傾向に注目した相関分析について

本実験で用いた各尺度間の関連、および想像活動への没入傾向との関連を検討する目的で、相関分析を実施した。その結果、III-14とMPI(N尺度)との間に有意な弱い正の相関関係が認められた。笠井(1999)は、(イメージへの)没入傾向は病的な部分との関連をもつ一方で内面の世界への親和性とも関わりがあると指摘しているが、この指摘を部分的に支持する結果といえよう。

III-14はまた、TVICとの間に有意な弱い正の相関関係を示している。この結果は、開眼-閉眼のいずれのイメージ条件においても認められ、想像活動への没入傾向とイメージの統御可能性との関連を示唆すると思われる。両者の関連を直接検討した先行研究はないが、大宮司・川村・木村・笠井(1998)は変性意識(ASC)傾向とTVICの関連を検討し、変性意識傾向が高いことが必ずしも低いイメージの統御可能性には関連しないことを示

唆している。本研究の結果もこれに類似しているが、その機序は明確ではない。高い没入傾向が高い統御可能性を伴うのか、あるいは統御可能性が高まることで深い没入が可能になるのかといった視点からの、両者の検討が有用だろう。

総合考察

イメージの心理臨床において、安全性の観点から注目されている開眼-閉眼のイメージ想起条件に注目し、性格特性やイメージ想起傾向との関連から分析を行った。従来の研究では開眼-閉眼条件が鮮明性や統御可能性に及ぼす有意な効果が認められていなかったが、特に性格特性（神経症傾向）に注目した場合に、いくつかの重要な結果が得られた。

この結果は、とりわけ心理臨床場面において重要と思われる。すなわち、クライアントの性格特性に応じて開眼-閉眼イメージを使い分けることで、よりその状況に即したイメージ体験をすることができるかもしれない。

同様に、開眼イメージと閉眼イメージの「どちらが好きか」「どちらが思い浮かべやすかったか」の想起傾向に注目した場合も、これらのイメージ想起の傾向と鮮明性や統御可能性との関連が示唆された。とりわけ思い浮かべやすかったかどうかの影響は大きく、イメージ想起傾向の個人差の重要な次元として検討を進めていく必要があるだろう。

従来、イメージの基礎研究と臨床研究における個人差として重要視されているのはイメージの鮮明性の次元であった。後者の視点は特に行動療法でのイメージ利用において盛んに研究されており、たとえば田中（1994）は、鮮明性を「詳細さ（detail）」と「鮮烈さ（impact）」に分けることを提案し、イメージによる情動喚起に及ぼす影響について検討している。

一方で Ahsen（1985）は、イメージの鮮明性は安定した個人差というよりも、身体や意味との関連で変動するものと指摘している。また、神村・笠井（2001）は、恐怖などの情動を伴うイメージの想起に際しては認知的な回避が生じて、不鮮明なイメージしか想起できない、と述べている。これらの指摘から考えると、イメージの鮮明性の次元は、情動や身体との関連から産出されたイメージに付随する「結果」としての側面が大きいものかもしれない。心理臨床の援助においては、その結果を導くための「介入」が何であるのかにより注目する必要があるだろう。

福留（2004）は、イメージには主体の意図的な操作や統御が及ぶ「操作可能領域」とそれが及ばない「自律領域」とがあると指摘し、操作可能領域に働きかけることが即イメージの自律性を妨げることにはならない、と述

べている。本研究で用いた開眼-閉眼のイメージ想起条件は、イメージの自律性を妨げない働きかけの工夫の一つであり、従来用いられている統御可能性の次元よりもさらに重要なイメージ統御の次元であると考えられる。

従来用いられてきたイメージの統御可能性は、本研究でも用いた TVIC に代表されるように、想起したイメージの内容を統御するのが中心的である。対して開眼-閉眼イメージ法の使い分けができるといった統御可能性は、イメージの内容への影響は未知数であるが、心理臨床場面で重視されている「どのようにイメージを体験しているか（イメージの体験様式；田眞，1987）」に影響する可能性がある。その日の気分や体調、あるいはその場の状況などによって開眼-閉眼のイメージ法を使い分けたり、セラピストがクライアントの状態に応じて開眼-閉眼のイメージ法を示唆することで危機的状況の回避やイメージの深化につなげたりできるかもしれない。開眼-閉眼の使い分けを含めた、いわば「イメージの体験様式の統御可能性」ともいえる能力ないし介入法の検討が、心理臨床場面におけるイメージ研究の視点として重要になってくる可能性があるだろう。

付記

本論文は、平成16年度九州大学教育学部卒業論文として提出した研究の一部を抜粋し、加筆修正したものである。本論文の作成にあたり、ご校閲を賜りました九州大学大学院人間環境学研究院の野島一彦先生、英文の作成でご助力いただきました九州大学大学院言語文化研究院の Anscorn-Iino 先生、またご尽力いただきました九州大学大学院の寺坂明子さんに、深く感謝いたします。

文献

- Ahsen, A. 1984 ISM: the triple code model for imagery and psychophysiology. *Journal of Mental Imagery*, 9, 15-42.
- Ahsen, A. 1985 Unvividness paradox. *Journal of Mental Imagery*, 9, 1-18.
- 大宮司信・川村 円・木村陽子・笠井 仁 1998 女子大学生における変性意識状態とイメージとの関連—ASC 検査と III, QMI, TVIC の関連— 催眠学研究, 43, 30-40.
- Euse, F. J., & Haney, J.N. 1975 Clarity, controllability and emotional intensity of image: Correlations with introversion, neuroticism and subjective anxiety. *Perceptual and Motor Skills*, 40, 443-447.
- 福留瑠美 1994 安全感の育成とイメージの利用 日本心理臨床学会第13回大会発表論文集.

- 福留瑠美 2004 イメージ表現法におけるクライアントの「安全」の育成に関する臨床心理学的研究 九州大学提出博士論文。
- 藤岡喜愛 1974 イメージと人間—精神人類学の視野 日本放送出版協会。
- 藤原勝紀 1980 三角形イメージ体験法 成瀬悟策(編) 催眠シンポジウムX イメージ療法 誠信書房 Pp.38-59.
- Gordon, R. 1949 An investigation into some of the factors that favour the formation of stereotyped images. *British Journal of Psychology*, **39**, 156-167.
- 長谷川浩一 1984 心像体験の測定に関する研究(2) 青山学院大学文学部紀要, **26**, 81-105.
- 長谷川浩一 1993 心像の鮮明性尺度の作成に関する研究 風間書房。
- Hatakeyama, T. 1997 Adults and children with high imagery show more pronounced perceptual priming effect. *Perceptual and Motor Skills*, **84**, 1315-1329.
- 菱谷晋介 1984 イメージの個人差に関する研究: その意義と方法論上の問題 心理学評論, **27**, 410-429.
- Horowitz, M. J. 1983 *Image Formation and Psychotherapy*. Jason Aronson.
- 穂山貞登 1983 イメージと創造性 教育と医学, **31**, 43-49.
- 神村栄一・笠井 仁 2001 情動とイメージ 菱谷晋介(編著) イメージの世界—イメージ研究の最前線— ナカニシヤ出版 Pp.115-137.
- 笠井 仁・井上忠典 1993 想像活動への関与に関する研究: 測定尺度の作成と妥当性の検討 催眠学研究, **38**, 9-20.
- 笠井 仁 1999 想像活動への没入傾向とパーソナリティ特性との関連 催眠学研究 **44**, 17-22.
- 栗山一八 1979 自発性イメージ 成瀬悟策(編) 催眠シンポジウムIX 心理療法におけるイメージ 誠信書房 Pp.238-253.
- Marks, D. F. 1973 Visual imagery differences in the recall of pictures. *British Journal of Psychology*, **64**, 17-24.
- 増井武士 1986 危険なイメージを「包み込む」技法 前田重治(編) カウンセリング入門 有斐閣出版。
- 松本明夫 1999 不安傾向とイメージ体験の関連—主にイメージ体験の様式について— 催眠学研究, **44**, 3-8.
- 宮崎清孝 1989 想像から創造へ—イメージと創造性— 教育と医学, **37**, 370-376.
- 水島恵一 1967 イメージ面接における治療過程 臨床心理学研究, **6**, 10-19.
- 水島恵一 1983 体験的認知としてのイメージの理論 水島恵一・上杉喬(編) イメージの基礎心理学 誠信書房 Pp.238-253.
- 水島恵一・成瀬悟策・藤原勝紀 1999 イメージ療法を考える—その未来をみつめて 現代のエスプリ387 イメージ療法 至文堂 Pp.5-36.
- MPI研究会(編) 1964 新・性格検査法—モーズレイ性格検査— 誠信書房。
- Narchal, R., & Broota, K. D. 1988 Sex differences in visual imagery under eyes open an eyes close condition. *Journal of Mental Imagery*, **12**, 81-88.
- 野村康治 1993 開眼, 閉眼, 投影条件下における視覚イメージ鮮明性の差異 心理学研究, **14**, 35-41.
- リチャードソン A. 鬼沢 貞・滝浦静雄(訳) 1973 心像 紀伊国屋書店. (Richardson, A. 1969 *Mental Imagery*. Routledge and Kegan Paul: London.)
- 柴田出・坂上祐子 1977 ATによるイメージ療法を応用した神経症の一例 催眠学研究, **22**, 7-13.
- Singer, J. L., & Antrobus, J. S. 1972 Daydreaming, imaginal processes and personality: A normative study. In Sheehan, P. W. (Ed.), *The function and nature of imagery*. New York: Academic Press. Pp.175-202.
- Stricklin, A. B., & Penk, M. L. 1980 Vividness and control of imagery in personality types. *Journal of Mental Imagery*, **4**, 111-114.
- 田中輝美 1994 恐怖イメージの鮮明さ: 細分の意義について 行動療法研究, **20**, 10-19.
- 田嶋誠一 1983 “壺”イメージ療法 広島修大論集, **24**, 71-93.
- 田嶋誠一(編著) 1987 壺イメージ療法—その生い立ちと事例研究— 創元社。
- 田嶋誠一 1996 壺イメージ法の考案とその展開に関する臨床心理学的研究 九州大学提出博士論文。
- 田嶋誠一 2003 イメージ面接 田嶋誠一(編) 臨床心理面接技法2 誠信書房 Pp.207-268.
- 田嶋誠一・成瀬悟策 2003 壺イメージ療法 アニーズ A. シェイク(編) 成瀬悟策(監訳) イメージ療法ハンドブック 誠信書房 Pp.290-309. (Sheikh, A. A. (Ed.) 2002 *Handbook of therapeutic imagery techniques*. Baywood Publishing Company: New York.)
- 上杉 喬 1983 イメージと思考 水島恵一・上杉喬(編) イメージの基礎心理学 誠信書房 Pp.103-136.